

明治から戦災復興期における仙台の国分町通りと東一番丁通りの変遷

The Historical Changes of KOKUBUNCHO St. and HIGASHIICHIBANCHO St. in SENDAI

東北大学 正会員 平野 勝也
東北大学 学生員○関 孝太郎

By Katsuya HIRANO
Kotaro SEKI

論文要旨

わが国における都市構造の歴史的変遷を見ると、中心商業地は、一般的に旧街道沿いに発展してきた。しかし仙台は例外であり、旧街道沿いである国分町通りと東一番丁通りの賑わいが昔と現在で逆転している。これは、都市の発展史を考える上で重要な事例と考える。そこで、文献、史料を中心としてその変遷を追った。その結果、以下の2点が明らかになった。①明治期の東一番丁の開発と鉄道開通により、中心商業地が拡大し、東一番丁の商業、国分町の業務という機能の分化が生じた。②戦災復興事業により業務機能が青葉通り等に移行し、国分町通りが裏通りとなった。

Key Words : 街路の変遷, 仙台, 中心商業地

1. はじめに

わが国の都市の多くは城下町を経るなどの歴史を持っているが、その発展過程には様々なパターンが見られる。中心商業地については、佐藤¹⁾による城下町類型とその変遷パターンの研究にもあるように、大きく分けて2つのパターンがある。旧街道沿いの中心商業地が現在の中心商業地となっているものと、鉄道によって旧街道沿いの商業地と駅を結ぶラインが新しく発展し、旧街道沿いの商業地自体は衰退するというものである。

しかし仙台では、昔の街道筋の目抜き通りであった国分町通りと、その裏通りに過ぎなかった東一番丁通りの関係が逆転した。これは、佐藤の言うどのパターンにも当てはまらない特異な事例であり、興味深い。しかも、この二つの通りは約100m程度と極めて近い。

既存の郷土史等の文献では、その多くが街路を興味の対象としておらず、有用な参考文献は極めて少ない。そのなかでも、例として柴田の『東一番丁物語』²⁾では、明治期の様々なエピソードを扱っているが、通史的なことは触れられていない。また、栗野の『芭蕉の辻』³⁾では、絵葉書による年代ごとのある程度の変遷について触れている。しかし、どういったことが要因か、ということとは述べられていない。双方とも断片的なエピソード記述されているが、全体的な変遷の流れは述べられていない。また、都市の構造についての解釈は取り扱われていない。

そこで、本研究では、国分町通りと東一番丁通りの表裏が逆転したという歴史的変遷を探り、その要因を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法および時代区分

本研究では、二つの通りの変遷を追うため、主に文末に掲載した文献および史料を中心に調査し、また必要に応じてヒアリング調査も行った。

仙台におけるこの両通りの逆転の流れについて、社会情勢により以下のように時代を設定した。(1) 藩政時代、明治維新によって人々が暮らしを変えざるを得なかった(2) 明治維新时期、鉄道の開通によって町の構造が大きく変化した(3) 明治中期、仙台市の発展期である(4) 明治後期・大正・昭和初期、空襲で焼け野原になった跡の新しい計画が行われた(5) 戦災復興期である。

以下、各時代における変遷の事実とその解釈を述べていく。

3. 各時代の史実とその解釈

(1) 藩政時代

藩政時代、国分町は奥州街道沿いの町であり、市を開催する特権を与えられていた商人町であった。また、「伝馬役も勤め、馬市が開催されており、また、街道筋であったため宿駅としても繁榮し、藩政末期には東北一の繁華街として知られていた。」(仙台あちらこちら)⁴⁾

国分町の地名は、「仙台開府以前、この地の領主であった国分氏の家臣である国分衆を木ノ下薬師堂周辺の国分日町から移転させて集住させたことによる。」(角川日本地名大辞典4宮城県)⁵⁾ 慶長6(1601)年に仙台の城下町が建設された。その際の特徴として、「市街地の多くは侍屋敷・寺屋敷によって占められたが、侍の屋敷まち「丁」あるいは「小路」と組土以下の足軽・小人・職人・商人の住むまち「町」とが明確に区分され、

その配置を混合することはなかったことである。」(あきんどの町)⁶⁾ とある。国分町と東一番丁など、現在仙台の街中に見られるこの違いは、当時の丁割りの名がそのまま用いられているためである。

以上のことから、国分町は、奥州街道沿いで仙台の中心商業地であり、芭蕉の辻は、奥州街道と、仙台城と城下町を結ぶ道が交差する重要な交通拠点でもあった事がわかる。

国分町通りが交差する芭蕉の辻は、「城下建設の際、町割り、屋敷割りの基線となった重要な地点で、城下で最大の賑わいを持った繁華の地であり、江戸道中六十三次九十三里および奥道中四十五次一〇七里の基点であった。また、四隅の建物の構造、配置からしても仙台城から最も近い軍事防禦線であったとよくいわれているところである。」(あきんどの町)⁷⁾ 四隅には華麗かつ重厚な建造物があり、都心のランドマークとして偉観を呈していた(図-1)。この4棟の町家は、消失するごとに藩からの援助で再建され、最後の西北角の1棟は第二次大戦時まで存在した⁸⁾。奥州街道と、仙台城と城下町を結ぶ道が交差する重要な交通拠点でもあった。

一方東一番丁は、「丁」の字が示すとおり藩士のみが住む武家屋敷街で、当時、東から順に東十番丁までであった。「一番丁はそれだけ屋敷が二番丁より大きかったし、城に近かったので数百石の武士達が住んでいた。」(仙台あちらこちら)⁹⁾ さらに、「ところどころに杉木立や竹藪がうっそうと茂っていて、侍屋敷や藩の土蔵などは、長くめぐらされた杉生垣や土塀の中に建てられてあり、夕闇の迫る頃ともなれば無数の蝙蝠が飛び、怪しげな鳥が泣き叫んでいたという。」(東一番丁物語)¹⁰⁾ という状況にあった。

すなわち東一番丁は、非常に静かな武家屋敷街であり、もちろん商店などは一軒も無かった。

この時代は、国分町は奥州街道沿いで仙台の中心商業地であり、東一番丁は現在の賑わいなどはかけらもない閑寂な武家屋敷街というように、明確に分かれていた時代だと考えられる。(図-2)



図-1 芭蕉の辻四つ角の様子(伊藤武陵画、考証三原良吉、「東北声の新報社創立5周年記念のイラスト」の掲載図(粟野邦夫、「芭蕉の辻」、仙台なつかしクラブ、pp.112, 2001年)を修正)

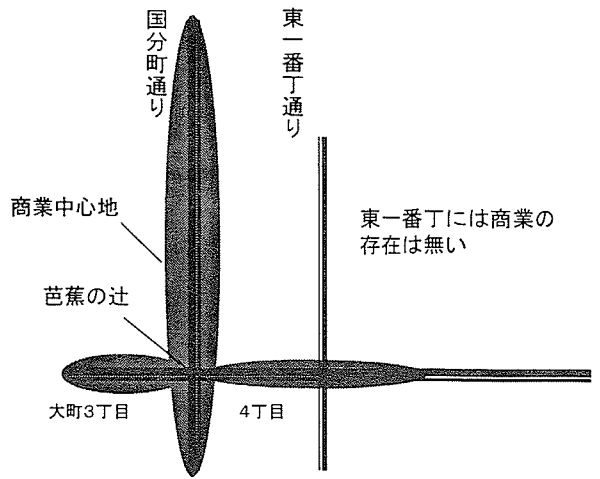


図-2 明治以前の様子(作成:筆者)

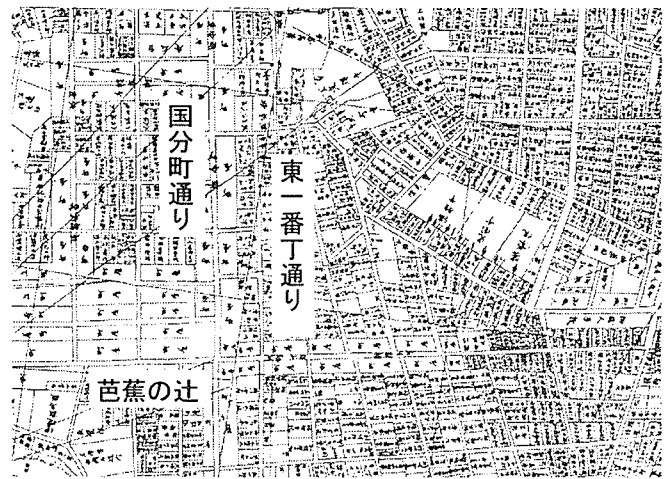


図-3 安政3-6年の地図(原図:高倉淳、「地図・絵図で見る仙台」、今野印刷、1994を抜粋の上加筆)

(2) 明治維新时期

戊辰戦争(1868年)に敗れた仙台藩は、62万石から一挙に28万石へと減封された。さらに「版籍奉還などの目まぐるしい変化の中で市内の景気は沈滞し、人口も減少した。」(仙台あちらこちら)⁴⁾

国分町通りはこのような状況の中でも、「国道すじでしかも中心部にあったため旅館町として」(仙台あちらこちら)⁴⁾ 存在し、また、「明治2年にそれまで石巻と塩釜のみに許されていた遊女屋の営業が始まった。」(東一番丁物語)¹¹⁾ 「国分町南の南町には明治5年に仙台郵便所が設置された。」(番丁詳伝)¹²⁾ 「明治7年には仙台電信局が開局した。」(仙台市史資料編6産業経済)¹³⁾

このように明治維新による不景気や、社会情勢の変化はあったが、新規立地も行われ、国分町の中心商業地区としての地位は揺るがなかったと考えられる。

一方、東一番丁では、明治維新によって、「武士達はその職を失い、それまで全くの消費生活者であったた

め、なす術を知らず、ただ家財や土地建物を売る以外に生活の術は無かった。」(郷土史事典宮城県)¹⁴⁾

その折、「伊達家には由緒ある重臣であり、しかも砲術指南役という重い職責を担っていた山家豊三郎は、明治初年、東一番丁をいかなる町に発展させ、また職を失った士族にいかなる生活を与えようかと苦心して、幾度か東京、京都、大阪方面に出向き、つぶさに視察研鑽した結果、東一番丁は商店街に生きることが最良策であるとの信念を得て、ここに東一番丁の方向が決定されたという。」(東一番丁物語)¹⁵⁾

手始めに彼は邸内に小店舗十数軒を建築し、商売希望者にこれを貸与した。しかし、その周辺は茅や蓬などが茫々と生い茂っている通路に過ぎなかったため、借り手の希望者はなかなか無かった。そこで彼は新築の店舗に、彼の随臣であった近藤文吉に煙草刻みを習得させ、煙草屋を開業させた¹⁵⁾。「煙草の葉を機械で刻むのが珍しく、作業が始まると店先は見物人の山となった。」(郷土史事典宮城県)¹⁴⁾これが商店の誘導となって、煙草刻みの実演販売の他、当時の仙台としては目新しい商業ができていった^{15) 16)}。

「彼はまた、夜の股賑を企図して夜店を始めた。場所は山家横丁(現在の広瀬通り)を中心として東一番丁の一部であったが、最初はそんな寂しい場所に何程勧誘しても商人は出てくるはずがないので、彼は毎夜、その商人等に灯火代と握飯とを供給して出店を奨励した。同時に、同邸内に祀ってある山家明神ことと霊神社を開放して、一般人に参詣の便を与え、時々盛んな同社の祭礼を催したりしたので、この界隈が次第に賑わって繁盛してきた。」(東一番丁物語)¹⁷⁾

このように、東一番丁の商業の起りは山家豊三郎による、武士の生活方法確保のための開発であった。

また、明治初年の地価は、芭蕉の辻が坪1円20銭、東一番丁は坪10銭で12倍の大きな開きがあった¹⁸⁾。

この時代は、東一番丁は山家豊三郎によって商業地としての起源がもたらされ、国分町の裏通りとして順調なスタートを切り、国分町は地価の面からもわかるとおり、依然として仙台の中心商業地であったと考えられる。

(図-4)

(3) 明治中期

明治9(1876)年に仙台で最初に博覧会が開かれる。明治13年には桜ヶ丘公園で、三府二十八県から集めた農、工業等の産業生産品を集めた本格的な博覧会が開かれた。これをきっかけに、翌14年には同じ会場でも米豆共進会が開かれたが、これら博覧会と共進会の展示即売品の売れ残りをさばくために14年7月に官営宮城勧工場が開設された¹⁹⁾。勧工場とは、新しい商品陳列、値札どおりの正札商いを行い、一種の市場、デパートのようなものであり、大変盛況になった。これはいわば業態の変化を意味する。

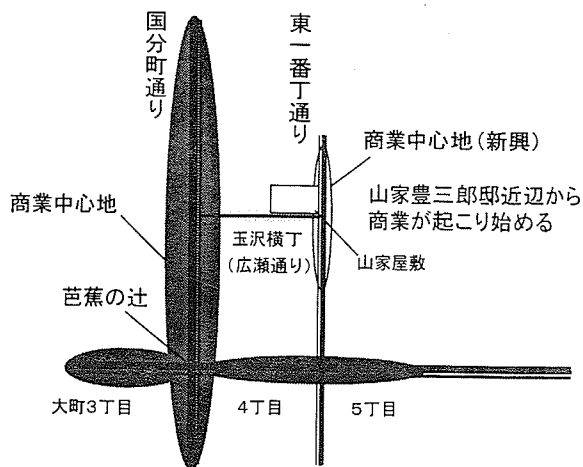


図-4 明治維新期の様子(作成:筆者)

さらに、鉄道の開通により、町の構造に変化が見え始める。「明治20年12月、東北本線の開通とともに仙台停車場が開業する。当初、停車場は榴ヶ岡に置くことが予定されていた。しかし、当時の県知事松平正直は、より中心部に近づけることが良策と考え、19年4月、市内有志40余人を招いて対策を協議させた。また、仙台の有力商人も計画変更による資金の不足分7万円のうち3万円を捻出し、住民の請願を取りまとめ、各層あげての猛運動を行って、東六番丁の現位置への変更が実現した。」(仙台商工会議所百年史¹⁹⁾、あきんどの町²⁰⁾)

「鉄道の開通は商業界にいくつかの影響をもたらした。第一に、これまで交通が不便で、商品調達が困難という条件の中で、海運を中心に特権を与えられて大きくなった日野屋、奈良屋などの大問屋を没落の方向へ向かわせたこと。第二に鉄道の開通で中央から直接仕入れができるようになったため、今まで頭を押さえられてきた小売商の勢力が大きくなってきたこと。第三に、中央から商社、出先が新しい市場開拓のため進出してきたこと。第四に、これは大きな事件といえるが、これまで繁華の中心であった大町西方、国分町が衰微をみせ大町五丁目、新伝馬町とともに、新興商店街の東一番丁も商業集積を高め繁榮していくこと。第五に、停車場周辺が整備され、名掛丁、元寺小路、南町が脚光を浴びてきたことである。」(あきんどの町)²⁰⁾

当時国分町には十九軒(とくだな)と称していた菓種問屋、呉服問屋、繰綿問屋、小間物問屋などの卸売業が存在していた。芭蕉の辻から玉沢横丁角までに並ぶ商店であったが、国分町は卸売中心の問屋街でもあった²¹⁾。しかし、この十九軒も先述の奈良屋などのように、鉄道開通以降は年々影が薄れていった。

また、鉄道の導入により、中心地である芭蕉の辻を除いた奥州街道の往来が減って、芭蕉の辻から離れた国分町は衰退したと考えられる。それは、後述するように、当時仙台は人口停滞期であり、衰退なき発展はありえないと考えられるからである。

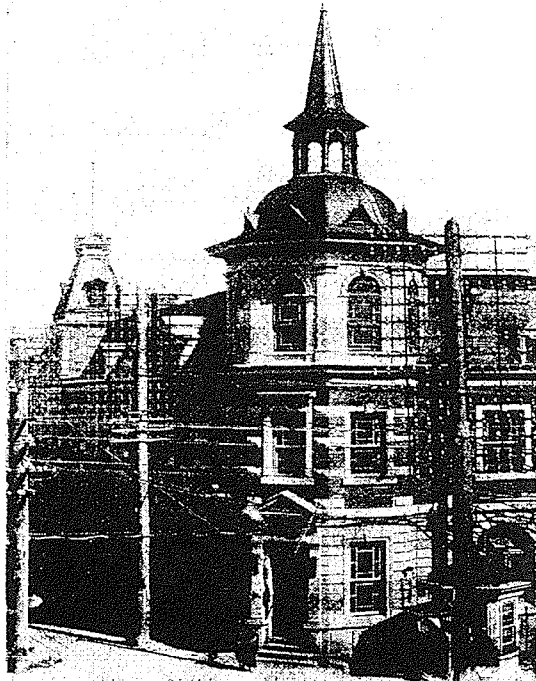


写真-1 七十七銀行本社屋（撮影時期不詳，明治36～大正8年，栗野邦夫，「芭蕉の辻」，仙台なつかしクラブ，pp.37, 2001）

また国分町には生命保険会社，銀行といった業務系の会社の進出が見られた。明治27年に帝国生命仙台支店，明治32年に日本火災保険代理店，明治36年には芭蕉の辻に七十七銀行が近代的な本社屋を建造した（写真-1）。

国分町は徐々に小売から卸売に変化して，またしだいに業務街の様相を呈していった。

鉄道の開通による商業中心地の移動を見越して，店舗を移転させた事例も多い。文政2（1819）年，当時の大町二丁目に創業した藤崎は，明治に入ると商業中心地の移動を予測して，明治30年に現在の場所（当時の住所で大町五丁目）に新築移転をした²²⁾。

三原時計店は明治20年に国分町の肴町角，現在の徳陽シティ銀行跡に開業した。「当時の店舗屋上に設置された時計塔は，文明開化の象徴であると共に，人々の目を驚かせたものである。明治29年に通行量や商店街の移り変わりを見越して大町五丁目に移転した。」（仙台のしにせ）²³⁾

一方，東一番丁は，先述宮城勸工場が閉場した後，出店者有志がこれを継承していたものを東一番丁に移転した東一番丁勸工場（第一勸工場）が出店して以降，東一番丁を中心に相次いで勸工場ができる²⁴⁾など，また，劇場などの新興の商業相次いで進出し，商業地としての装いを呈していった。

この時代は人口停滞期であった。明治22年に86,352人，明治24年には58,679人，明治35年には83,340人である。それにも関わらず東一番丁が商業地として発展

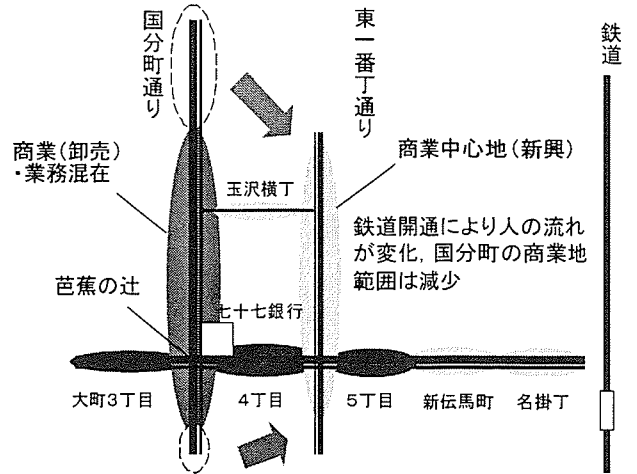


図-4 明治中期の様子（作成：筆者）

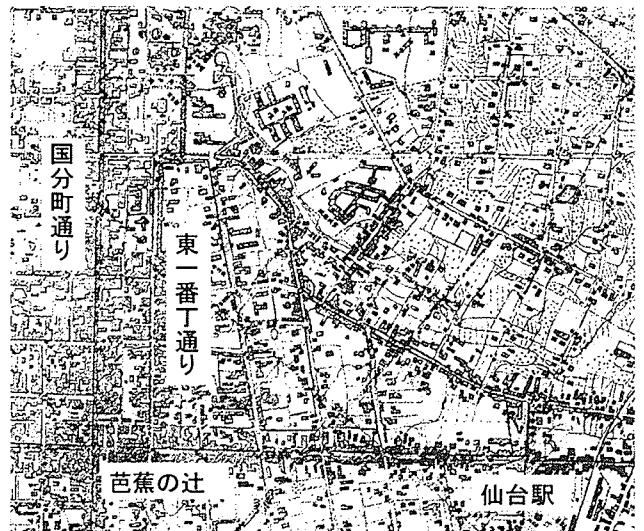


図-5 明治26年の地図（原図：高倉淳，「地図・絵図で見る仙台」，今野印刷，1994 を抜粋の上加筆）

しえたのは，芭蕉の辻から離れた奥州街道沿いの商業地区の範囲が，鉄道による南北方向から東西方向への人の流れの変化のために減少し，その分の中心商業地としての供給分を東一番丁が得ることができたためだと考えられる。

この時代は，鉄道により都市構造が変化し，人の流れが奥州街道の国分町を中心とした南北方向から，仙台駅と芭蕉の辻を中心とした東西方向へと移り，仙台の玄関口が移動すると共に中心商業地が東へ移動した時代であると考えられる。（図-4）

(4) 明治後期・大正・昭和初期

当時の仙台市の人口は、明治 39 年 103,357 人、大正 10 年 114,279 人、昭和 1 年 140,342 人、昭和 5 年 190,180 人、昭和 15 年 223,630 人で、大正 10 (1921) 年から昭和 15 (1940) 年の約 20 年間で 2 倍と著しい増加を示している。「このことは数次にわたる市域の拡張もその原因となったことは事実であるが、それに加えて資本主義勃興期における都市の人口吸引力を反映したものと見るべきである。」(仙台都市計画史)²⁵⁾

お茶の井ヶ田会長の井ヶ田徳治氏に対するヒアリング調査によると、昭和初年、国分町通りを通行止めにして大規模な下水道工事を行ったという。これにより人の流れが減少することを懸念した商店主達は一斉に国分町から店を移転した。井ヶ田(旧社名繁田園)は昭和 5 年に店舗を国分町から東一番丁へと移している。当時、昭和 2 年に仙台市第二期下水道事業施工認可、昭和 4 年に配水池竣工、昭和 5 年に仙台市下水道条例制定、昭和 6 年に上水道第一次拡張事業着工とあり、水道事業が相次いでいた²⁶⁾。

国分町は、「大正初年までに商店にも浮沈があり国分町も会社の多い町となりつつあった。三原時計店の跡に大正信託、その他古くからあった東京火災の外に横浜火災、日本火災、東北土地建物などの会社ができ、銀行の支店もあった。やがて丸善仙台支店も大きな店舗を新造し、第一次大戦後の好況時には風格のある町並をなし、五月の青葉神社の祭や七夕には町をあげて大どかで豪華な行事をくりひろげていた。」(仙台あちらこちら)²⁷⁾ また、芭蕉の辻周辺の様子は絵葉書にもなるほどの名所であった(写真-2)。

東一番丁は、「明治末年から大正初年にかけて洋食店が幅をきかせるようになった。年末には南町から一番丁大町角以南に仲見世が立ち賑わった。サーカス(曲馬団や見せ物)は南町の角あたりの空地に多く建った。」(仙台あちらこちら)²⁸⁾

東一番丁に三越が出店することによって、仙台経済界に動きが見られた。「三越仙台支店が開業したのは、昭和 8 (1933) 年 4 月 1 日だが、その開店の是非をめぐっての 3 年間は、仙台の商業人にとっても苦悩の戦いが続いた日々であった。」(仙台商工会議所百年史)²⁹⁾ 昭和 5 年、中央の百貨店が進出することに危機感を持った仙台商人は、進出阻止運動に踏み切った。運動は仙台のみならず東京に向いてまで行われた。この運動のため、開店時期は昭和 8 年に遅れたものの、結局進出を阻むことはできなかった。これを機に仙台商人の士気は高まり、藤崎は対抗して昭和 7 年には鉄筋コンクリート造りの近代的な店舗を築いて、本格的な百貨店になった。その後の三越の出店により、「淋しかった一番丁北部は急に活気づき、夜店は映画のはねるまで開かれ、食い物屋、喫茶店、屋台店も夜おそくまで天下太平を謳歌していた。」(仙台あちらこちら)³⁰⁾ また、より強固なもの

となった藤崎と三越のラインは、大正 15 年に開通した仙台市電によっても、人の流れが加速されたといえる。

当時の地価(明治 44 年)を見ると、東一番丁が平均で 14 円 90 銭、国分町が平均で 13 円 45 銭と東一番丁のほうが高くなっている。芭蕉の辻は 22 円 50 銭であり、東一番丁との比は 1.5 倍ほどで、以前ほどの開きは見られなくなっている³¹⁾。

この時代は、明治後期から大正期にかけて、仙台市の人口増加によって繁華街が成長する過程で、東一番丁の商業中心地区、国分町の風格ある業務中心地区といった機能の分化が進んでいき、昭和初期にはその分化が明確になっていった時代であると考えられる。(図-6)

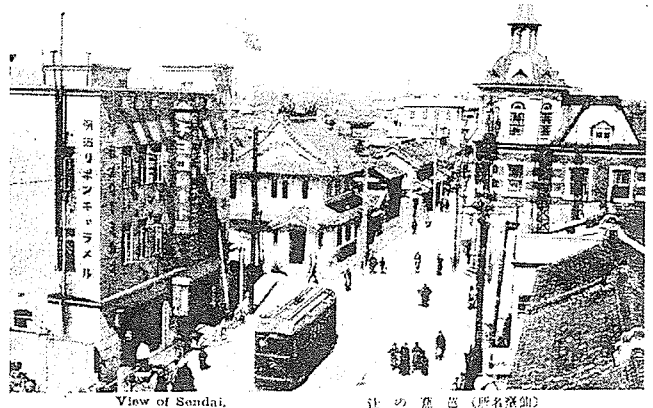


写真-2 芭蕉の辻の絵葉書(撮影時期不詳、昭和 3 年~昭和 7 年、栗野邦夫、「芭蕉の辻」、仙台なつかしクラブ、pp.83, 2001)

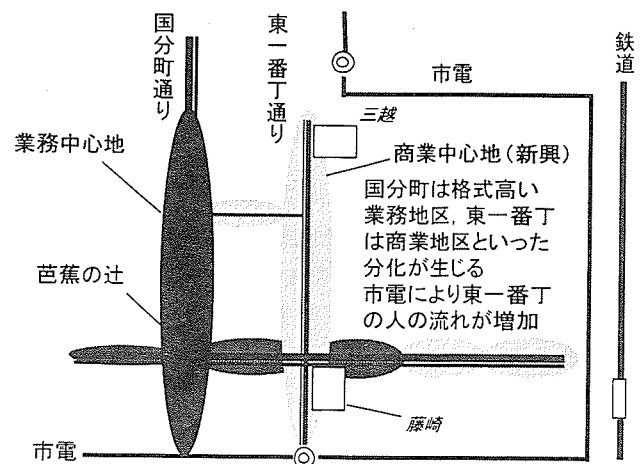


図-6 大正・昭和初期の様子(作成:筆者)

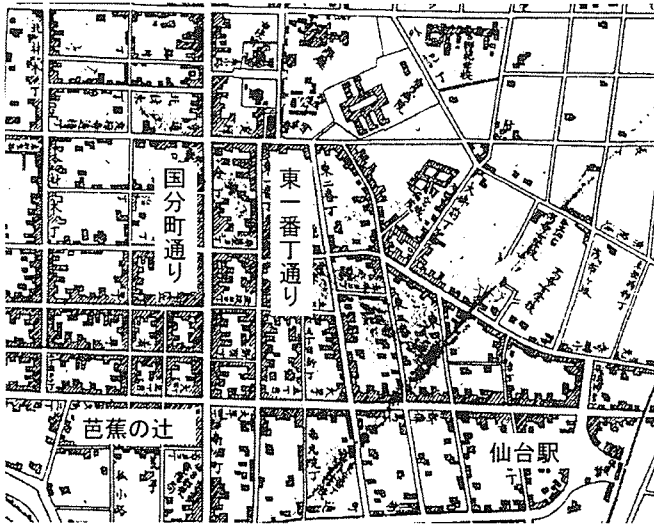


図-7 明治 41 年の地図 (原図：仙臺市測量全図 を抜粋の上加筆)

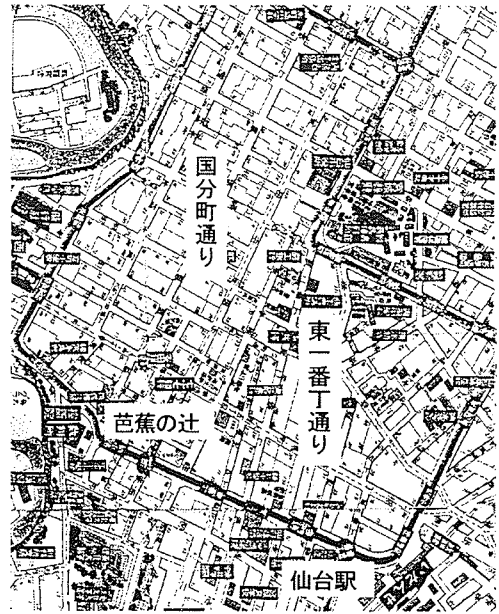


図-9 昭和 14 年の地図 (原図：最新刊地番入仙臺地図 中央部 を抜粋の上加筆)

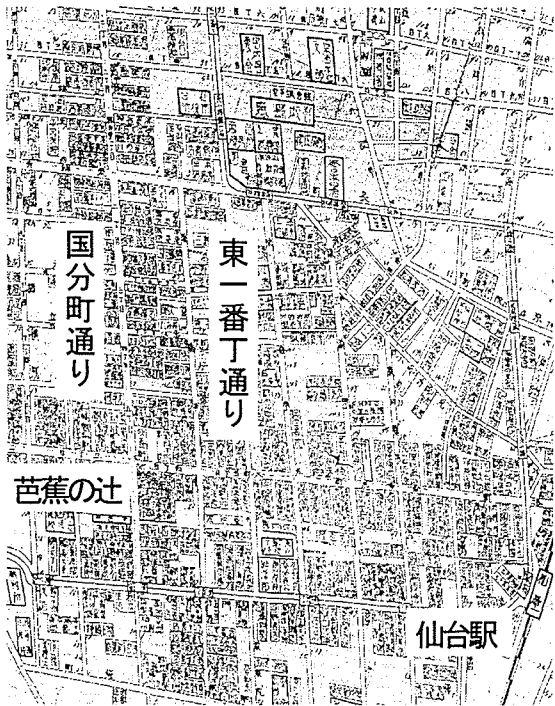


図-8 昭和 8 年の地図 (原図：大日本職業別明細図, 仙臺市歴史民俗資料館 を抜粋の上加筆)

(5) 戦災復興期

空襲によって焼け野原となった仙台は、戦災復興事業によって中心部の主要街路が整備された。しかし、金融機関等が立ち並ぶ業務中心地区であった国分町通りは拡幅されず、その業務機能は、青葉通り等の主要街路が完成すると徐々にそちらへ移行することになる。一方東一番丁通りは 8m から 15m に拡幅されることとなり仙台の中心商業地区としての復興を遂げた。

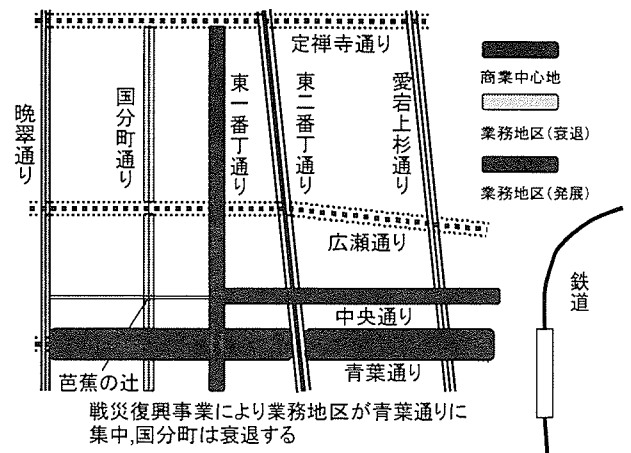


図-10 戦災復興期の様子 (作成：筆者)

仙台市都市整備局の岩崎裕直氏に対するヒアリング調査によると、国分町通りが拡幅されなかったのは、軒並み広幅員街路が整備される中、昔ながらの目抜き通りを保存しようという動きがあったことなどによる(仙台市役所)。

なお、国分町が現在のような歓楽街になったのは、昭和 40 年頃からの話である。

戦災復興期は、その街路整備計画後は、新たな業務会社の進出は国分町通りよりも、拡張整備された青葉通り等に相次ぎ、七十七銀行も昭和 30 年代前半に東二番丁通りへと移転した。また、絵葉書になるような名所も芭蕉の辻から定禅寺通りに移った。一方の東一番丁通りは中央通りと共に仙台の中心商業地として現在も変わらぬ地位を保っている。(図-10)

4. おわりに

本研究の結論は以下の通りである。

- ・ 東一番丁は、明治期の開発による下地、鉄道開通による中心商業地の移動、新興産業の受け皿であった。前身が待屋敷であり土地が安い、などの条件が重なり、繁華街の成長過程における機能分化によって商業が集積していったと考えられる。
- ・ 国分町は廃れて裏通りになったのではなく、機能分化によって業務地区へと移行し、戦前までは格式の高い通りであったが、戦災復興事業で拡幅されなかったために、業務中心地区としてのその後の発展が失われたと考えられる。

謝辞

ヒアリング調査に快く応じてくださった井ヶ田徳治氏（お茶の井ヶ田会長）、岩崎裕直氏（仙台市都市整備局）、また、多大なる御助言を頂きました早坂春一氏（仙台市歴史民俗資料館館長）に記して深謝を表します。

参考文献・引用文献

- 1) 佐藤滋：『城下町の近代都市づくり』、鹿島出版会、1995
- 2) 柴田量平：『東一番丁物語』、本の森、2001
- 3) 栗野邦夫：『芭蕉の辻』、仙台なつかしクラブ、2001
- 4) 佐々久：『仙台あちらこちら』、宝文堂、pp.32、1982
- 5) 角川日本地名大辞典編纂委員会：『角川日本地名大辞典4宮城県』、pp.240、1979
- 6) あきんどの町編集委員会：『あきんどの町』、おおまち商店街新興組合、pp.24、1983
- 7) 上記引用文献6)、pp.61
- 8) 高橋康夫ほか：『図集日本都市史』、東京大学出版会、pp.175、1993
- 9) 上記引用文献4)、pp.36
- 10) 上記引用文献2)、pp.17
- 11) 上記引用文献2)、pp.62
- 12) 番丁詳伝編集委員会：『番丁詳伝』、一・四・一、1987
- 13) 『仙台市史資料編6近代現代2産業経済』、仙台市役所、pp.386、2001
- 14) 佐々久：『郷土史事典宮城県』、昌平社、pp.191-192、1977
- 15) 上記引用文献2)、pp.68
- 16) 『仙台市史1本編1』、仙台市役所、pp.545-547、1974
- 17) 上記引用文献2)、pp.69
- 18) 上記引用文献6)、pp.59
- 19) 仙台商工会議所：『仙台商工会議所百年史』、pp.22、1992
- 20) 上記引用文献6)、pp.80-81
- 21) 三原良吉：『宮城の郷土史話』、宝文堂、pp.264、1975
- 22) 上記引用文献6)、pp.84-85
- 23) 仙台のしにせ編纂委員会：『仙台のしにせ』、仙台商工会議所、pp.192、1992
- 24) 『仙台市史特別編4市民生活』、仙台市役所、pp.36-37、1997
- 25) 仙台市開発局計画部都市計画課：『仙台都市計画史』、pp.135、1988
- 26) 『仙台市史資料編5近代現代1交通建設』、仙台市役所、pp.491、1999
- 27) 上記引用文献4)、pp.34
- 28) 上記引用文献4)、pp.38
- 29) 上記引用文献20)、pp.154
- 30) 上記引用文献4)、pp.39
- 31) 『仙台市史2本編2』、仙台市役所、pp.82-83、1975
- 32) 仙台市開発局、『戦災復興余話』、1980
- 33) 『仙台市史10年表・書目・索引』、仙台市役所、1975
- 34) 栗野邦夫：『辻標で歩く』、仙台なつかしクラブ、2000
- 35) 仙台市開発局、『目で見る復興 まちの今昔』、宝文堂、1983
- 36) 財団法人日本地図センター：『地図で見る仙台の変遷』、1998
- 37) 高倉淳：『絵図・地図で見る仙台』、今野印刷、1994
- 38) 平凡社：『城下町古地図散歩8 仙台 東北・北海道の城下町』、1998
- 39) 講談社：『日本の古地図③仙台・弘前』、1977
- 40) 今泉清、『曲直問答実録』、宝文堂、1987
- 41) 仙台市歴史民俗資料館：『大日本職業別明細図』、1933
- 42) 仙台市歴史民俗資料館：『御譜代町の生業－職人と商人－上巻』、1986
- 43) 仙台市歴史民俗資料館：『御譜代町の生業－職人と商人－下巻』、1987
- 44) 仙台市歴史民俗資料館：『いつか見た街・人・暮らし』、1993
- 45) 仙台市博物館：『市史せんだい Vol.1』1992
- 46) 吉岡一男：『新・仙台の散策』、宝文堂、1990
- 47) 山田安彦ほか：『歴史の古い都市郡3』、大明堂、1989